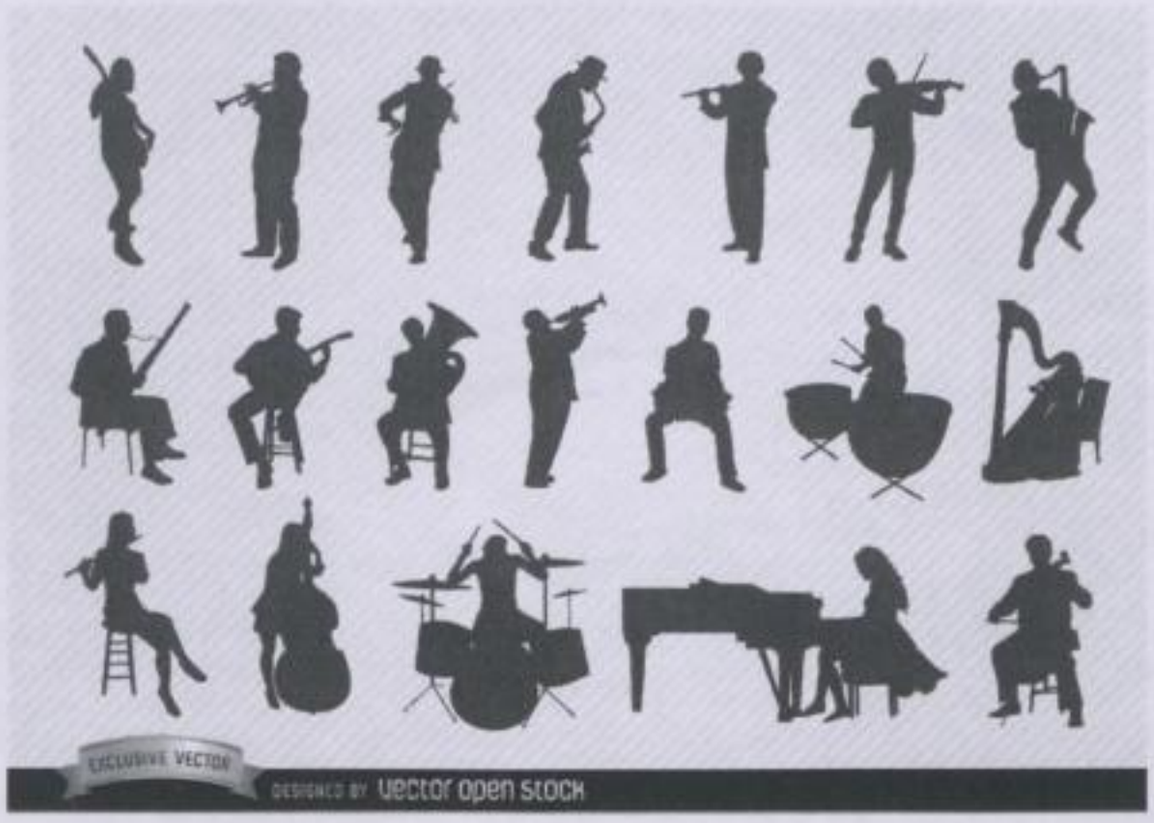
**ブラームス：交響曲第 1 番 ハ短調 Op.68**

ロマン主義全盛の 19 世紀において伝統的なジャンルと古典的様式を重視したヨハネス・ブラームス（1833－97）だが、崇敬する先人ベートーヴェンの偉大な交響曲に対する強い意識と、生来の自己批判的な性格とが相俟って、当初は交響曲という伝統ジャンルを手掛けることには慎重であった。交響曲を書く構想は初期の 1855 年前後から持ってはいたのだが、その後長年にわたって多くの試行錯誤を繰り返し、自分なりに納得のいく交響曲のスタイルを苦労しながら模索していく。完成をめざしての創作にやっと自信を持って本腰を入れるようになったのは 1874 年頃のことで、1876 年に交響曲第 1 番はついに実を結ぶこととなった。初演は同年に行われたが、その後ブラームスはさらに第 2 楽章に大幅な改作の手を入れ、現行の形に仕上げている。まさに労苦の結晶だけあって緻密に構築された交響曲で、その中にロマン的情感を豊かに湛えている点がブラームスらしい。

第 1 楽章（ウン・ポーコ・ソステヌート～アレグロ）は緊迫した序奏に続き、闘争的な主部が劇的に展開する。第 2 楽章（アンダンテ・ソステヌート）は叙情に満ちた緩徐楽章。終りの部分では独奏ヴァイオリンとホルンが美しいデュエットを奏でる。第 3 楽章（ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ）は間奏風の楽章。第 4 楽章（アダージョ～ピウ・アンダンテ～アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ）は不安な緊迫感の漂う序奏で始まり、霧を晴らすかのようなホルンの響きと荘重なコラールを経て、明朗な主部に入る。晴れやかで力強いフィナーレである。




SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie